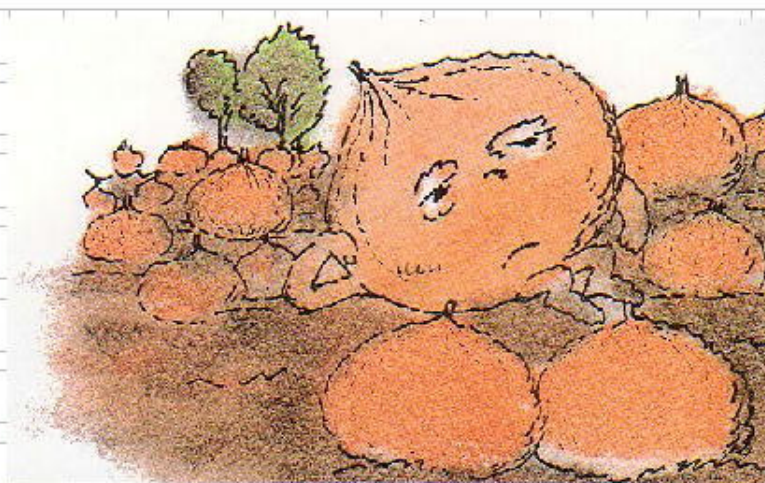


真 珠 に な っ た
た ま ね ぎ



たまねぎのきいちゃんたちには「ごろごろ
ねたろう」という、あだながついていました。
なぜかっていうと、大きくなるにつれて、土
の上にとびだしてくるので、まるで畑の上
にごろごろねているように見えるからです。
それにしても「ごろごろねたろう」とは、い
かにもなまけものみたいで、きいちゃんはと
てもいやでした。



そんなきいちゃんにとって、うれしいできごと
が occurred。たまねぎのしゅうかくもまじかになったある
日、きいちゃんたちが、あつい夏のひざしを
あびて、畑のうねでごろごろしていると、町

のレストランのコックちょうさんが、農場を
たずねてきました。

一週間後に、とにかくおいしいスープしかた
べないっていう世界一味にうるさいお客さん
が見えるので、スープりょうりにつかうざい
りょうをさがしに歩いているということです。
もちろんこの農場には、たまねぎをさがしに
やってきたのでした。



ひげをはやし、おなかのでっかいコックちょ
うさんは、農場の人と、ごろごろしているた
まねぎを、たんねんに見てあるきながら、こ
んなはなしをしていました。



「とにかくおいしいスープをつくるには、品質のいいたまねぎはなくてはならないもの。しかも、はだのいろつやがよくて、やわらかくて、それでいてちょうど身がしまっていて、ほどよい甘味がある真珠のようなたまねぎがほしい。そうしたら、わしは、だれにもまけないおいしいスープをつくって、味にうるさいそのお客さんをぎゃふんといわせてみせる。なにせ、そのお客さんは、まだいちども”おいしい”といったことがない人。これぞというスープをつくってみたいものだ。」



きいちゃんは、それをきいて思いました。
”そうか、ぼくたちたまねぎがいなかったら、
ほんとうにうまいスープはつukれないのか。
ごろごろねたろうなんていわれてるけど、ぼ
くだって、うわぎをとったらピッカピカの真
珠さ”

きいちゃんは、そう思いながら、コックちょ
うが自分のそばにちかづいてくるのをじっと
待っていました。

やがて、コックちょうが、ずしっ、ずしっと
土をふみしめながらちかづいてきます。

きいちゃんは、胸がドキドキしました。
そして、あまりにも胸がドキドキして、いち
ばん上のうすいきん色のうわ着をポトリとお
としてしまいました。



コックちょうのことですから、それを見のがすわけがありません。

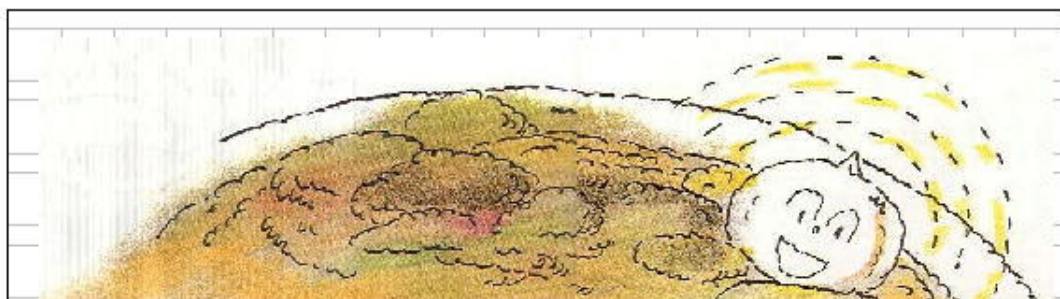
「おっ、これだ。それにしてもみごとなたまねぎ。」

そういって、きいちゃんをもちあげて、大よろこび。

それもそのはずです。きいちゃんの肌は、おひさまの光をはじいて、まるで大きな真珠。

「真珠だ、真珠だ、わしのさがしていた真珠だ。」

コックちょうは、農場の人から、さっそく、きいちゃんをわけてもらって、そそくさと帰りました。



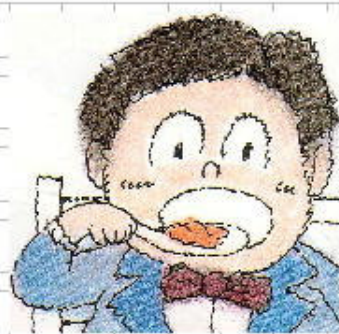
やがて、その日がやってきました。味にうる
さい男が、レストランにやってくる日です。
コックちょうは、材料のひとつ一つを、たん
ねんに調理し、りっぱなうつわにスープを入
れて、その味にうるさい男の前にさしだしま
した。

男は「なあに、どうせいなかの町のレストラン。
わしの口にあうスープなんて、つくれる
わけがない。」そう思いながら、目をとじ、う
でぐみをしていました。

コックちょうは”おいしいお料理を食べる前
にうでぐみしているとは、なんて礼ぎしらず
だ”と心の中で思いましたが、それをじっと
こらえて

「おまちどうさまでした。私のつくったオニ
オンスープ(たまねぎのスープ)をどうぞ、お

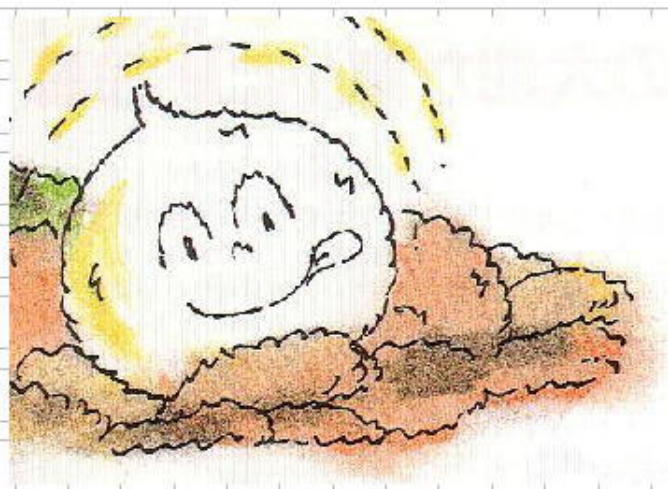
めしあがりください。」と自信たっぷりにいい
ました。
男はようやく目をひらいて、うでをほぐし、
スプーンをにぎろうとしました。
「おっ、これはなんだ。なんということだ。
いかに味に自信がないからといってスープに
真珠を入れてごまかすとは、なにごとだ。」
男はびっくりしておこりました。
するとコックちゃんがすかさずいいました。
「これはまたなんと、世界一味にうるさいと
いわれるお方が、たまねぎを知らないとは。
私どもがスープに使うたまねぎは、みんな真
珠のようにかがやいているんです。まあ、あ
まり、こうふんなさらずに、ひとくちおめし
あがりください。」



コックちょうになだめられ、男はしぶしぶ、
スープをすくって、ひと口、口にふくみました。
そして、目をしろくろさせていました。
「おお、これはうまい。これこそ、私がさが
していたスープの味だ。」

男はすっかりかんぶくして、スープを10ぱい
もたいらげました。

きいちゃんは、うつわのかたすみから、ちょ
っと顔をのぞかせ、舌をペロリと出しました。



「ごろごろねたろう、なんていっているけど、
ぼくたちがいなかったら、おいしいスープだ
ってつくれやしないのさ。」

(おわり)